

県立阪神昆陽高等学校 平成 28 年度学校関係者評価

4.0 の項目 3 つについては、本当によく頑張っていることが実感としてわかる。また 3.5 以上の項目も検討すると、日々先生方が努力されている項目である。そこで、この評価については、妥当な評価であるといえる。

評価が妥当であると考えると 3.0 を普通と考えれば、3.0 以下が 2 項目だけで、他が 3.0 以上ということは、大変すばらしく学校が運営されていると評価される。

ここで、3.0 以下の 2 項目について来年度特に改善すればさらによくなると思われる。

評価 2.8 の項目は、円滑な学校運営で、各種会議の問題である。会議日を作って会議をすれば効率が上がるように思われるが、一度にするのは効率が悪い。解決方法は時間割の中に会議を入れることであると思われる。全日制のように放課後がない多部制では、時間割の中に会議を入れ込まない限り、会議時間を取ることは困難である。つまり、年に 1 度時間割発表の時点がこの問題を解決する唯一の機会であり、運用で解決できるほど生やさしい問題ではないと思われる。ただ、時間割に会議を入れることは大変なことであることは確かだが、それをしない限りこの問題は永遠の問題になる。

評価 2.5 の家庭・地域・関係機関と連携した危機管理体制の充実に関しては、課題のところに具体性があまりなく想像域を出ないが、これも上の問題と関連していると思われる。

緊急事案が多く、その対応は十分されているが、その場での対応（経験豊富な方の力量に依っている）というところに問題があるのかもしれない。若い人が多い分、時間をかけてでも毎週会議を持ち、共通理解を図る環境を作ることで少しは改善できるかもしれない。

地域防災マップづくり等地域の活動に協力していることは評価できる。来年度は社会福祉協議会を含めて地域の様々な教育資源をもっと活用することを望む。

アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた授業研究を教科を越えて行っていることは評価できる。新学習指導要領では、「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」という言葉に置き換えられ、学びの量とともに、質や深まりが重要とされている。深い学びには、学問的な学びと教科と実社会との関わりに視点を置いた学びがある。貴校がどちらの方向でいくのか考えなければならぬ。

特別支援学校が同一敷地内にあり、交流及び共同学習に取り組んでいることは最大の強みである。これを発展させるためには、常に両校職員で意義を確認していく必要がある。

学校自己評価は悪い面が目立つが、生徒会の活性化や先進校視察による新しい取組の導入など、評価が高い項目を伸ばしてほしい。

学校自己評価に教員だけでなく、抽出でよいので生徒の評価を、来年度は調べる必要がある。

今後の大きな課題は新課程になった時のカリキュラムをいかにするかで、そろそろ組織的に対応を考えていく必要がある。

県立阪神昆陽高等学校 平成28年度 学校自己評価シート

<p>教育目標</p> <p>1 設置趣旨及び県がめざすべき3つの人間像を踏まえた、生徒一人一人の「生きる力」の育成</p> <p>2 併設の阪神昆陽特別支援学校との交流及び共同学習の推進</p> <p>3 高校生ふるさと貢献活動事業等を活用した地域に愛される学校づくり</p> <p>4 教職員の豊かな人間性や専門性、実践的指導力の向上</p>	<p>学校経営方針</p> <p>1 生徒の興味・関心や、多様な学習ニーズに応じて、主体的に学ぶことができる多部制単位制高等学校として、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を育む。</p> <p>2 阪神昆陽特別支援学校が同一敷地に設置されたメリットを最大限に生かして交流及び共同学習を推進し、ふれあいを通じた豊かな人間性を育むとともに、社会におけるノーマライゼーションの理念を進展する礎となる学校をめざす。また、両校の実践を県内のみならず全国へ発信する。</p> <p>3 学校評議員制度や高校生ふるさと貢献活動事業、特別支援学校交流・体験チャレンジ事業などを活用して、伊丹市池尻地区や尼崎市西昆陽地区など、学校周辺の地域と連携した教育活動を推進し、地域に開かれた、地域に愛される学校をめざす。</p> <p>4 「教育は人なり」という言葉があるように、両校の教職員は、教育の専門家としての使命感と高い倫理性を保持し、豊かな人間性の涵養に努める。また、専門性と実践的指導力の向上や、社会の変化に対応した教育観を培うことをめざして、研究と修養に努める。</p>
---	--

評価点：十分に達成できた=4、概ね達成できた=3、あまり達成できなかった=2、達成できなかった=1

領域	評価の観点	評価項目	実践目標	自己評価	成果	課題	改善策	
学校運営	開かれた学校づくり	保護者・地域等への情報発信等	1 ホームページやオープン・ハイスクール等により、保護者・地域への情報提供を行う。	4.0	・オープン・ハイスクールの回数を精選することで、より充実した受け入れ態勢を整えることができた。特に本校生ボランティアの活躍は好評を博した。 ・学校パンフレットやSPIRIT(一年の歩み)を新しくして、学校の魅力を広めることができた。	・オープン・ハイスクールの内容が固定化しつつある。	・オープンハイスクールの実施時期や内容について、広く教職員に意見を求め、長期的視野に立って刷新を図る。	
			2 設置趣旨を踏まえ、学校の教育活動等について、県のみならず他府県等にも、広く情報提供を行う。	3.3	・校長ブログにより、リアルタイムの情報提供をおこなうことができた。 ・北海道から沖縄まで5つの学校や学校関係団体の視察を受けた。	・ホームページの活用が場当たり的であり、コンテンツを全体に見直す必要がある。	・ホームページ活用についてのガイドラインを作成し、それに基づくコンテンツの提供を広く求める。 ・学校経営方針に基づき、各部での具体的な到達目標を掲げ、進捗状況も含め広く公開していく体制をつくる。	
		高校生ふるさと貢献活動事業等の推進	3 学校近隣地域等への貢献活動を通じて、生徒の自己有用感や自己効力感を育む。	3.5	・パンジーのプランター作成・設置を通じ地域の方々と交流できた。地域の方々に喜んでいただき、生徒の自己有用感を高める活動ができた。 ・地域ふれあい調理講習会を年2回開催することができた。	・「なぜ花を植えて配るのか」を理解しないまま活動している生徒が多い。 ・講習会の案内がうまく地域全体に伝わっていない。	・事前指導においてふるさと貢献活動事業の意味を生徒に理解させる。また、より地域に貢献できる活動内容を考えていく。 ・講習会の案内を伊丹市の広報に載せてもらうなどの工夫を行う。	
	円滑な学校運営	各種会議等の実施及び連携	4 各部会や委員会を適切に実施するとともに、校務運営委員会や職員会議等を通じ、各部・委員会等の意見調整を行い、円滑な校務運営を推進する。	2.8	・会議日を設定し、普段ではできない職員が一堂に会して会議を行う機会を設け、全職員の意思疎通を図った。 ・管理職と主幹教諭の打ち合わせをほぼ毎日行い、学校の課題や方向性を確認した。	・各部署間の連絡調整が不十分なため、校務運営委員会等の議事の進行が滞ることもあった。 ・構成メンバーがそろわない状態で会議が開催されることが常態化している。	・部長・主任が会議の議案を提出する前に、管理職に相談するよう年度当初等に伝えるとともに適宜打合せの時間を取る。 ・2部の時間帯を見直すことにより、多くの職員が集まれる時間を確保する。	
	勤務時間の適正化	業務のIT化・効率化	5 校内ネットワークの活用方法を研究し、情報と文書の共有化を図る。	3.3	・多くの職員が仕事に優先順位をつけ、定時退勤するようになっている。 ・職員打ち合わせの連絡にグループウェアを活用することにより、時間短縮を図ることができた。	・多大な仕事を抱える一部の職員が、定時退勤できるように仕事量の調整の実施。 ・グループウェアの部会議・教科会議での活用。	・1・2部の在り方を見直すことで、主任・副主任の仕事量を減らす。 ・部会議・教科会議で使用しやすいようにグループウェアの設定を改善する。	
		超過勤務の縮減	6 ノー残業デーの設定等により、教職員の超過勤務の縮減を図る。	3.0	・職員会議等会議のペーパーレス化及び情報と文書の共有化が進んだ。			
	生徒指導	生徒指導方針の徹底	7 生徒指導方針について全職員の共通理解を図り、生徒指導部と各部が連携して毅然とした態度で指導を行う。	3.5	・生徒指導方針全般について整理、見直し、改善を行った。特に単車通学に関してはルールを明確にした。職員研修や特別指導委員会等を通じて全職員の共通理解を図った。	・SNSを媒体とする友人間トラブルが増加傾向にあるので、生徒指導部と各部の連携をより密にしなければならぬ。 ・生徒指導部と各部で生徒情報の共有が十分できないときもあった。 ・課題を抱えた生徒の情報は共有できたが、対応について協議できたケースが決して多くなかった。 ・外部専門機関との連携の強化が課題で、大きな困難や疾病のある生徒への手厚い支援や援助ができていない。	・生徒指導部員が各部会議に参加するなどして、生徒情報の共有に努める。 ・共通のフォーマットを用意するなど会議の進行を工夫し、協議できる時間を確保する。 ・校医の先生と連携しながら、専門機関との連携を図る。	
		生徒の内面理解を図る指導の推進	8 個人面談・家庭訪問・カウンセリング等により生徒理解を深める。特にいじめの防止や早期発見・対応、自殺の未然防止について組織的に取り組む体制を確立する。	3.3	・心のサポート委員会等を通して生徒の情報を共有し、悩みや困難を抱えた生徒をスクール・カウンセラー等につないだ。 ・県立教育研修所とともに自殺予防教育LHRを実施することができた。		・時間割の都合などで1部1年次のみの実施となった。	・職員研修等を実施しバックアップ体制を整えた上で、組織的・全校的に取り組む。 ・生徒会執行部の活動の大まかな動きを記したマニュアルを作成する。
		生徒の自主性を育む指導の推進	9 生徒会を中心に、行事や部活動の運営に取り組み、生徒の自主的な活動の機会を設定する。	4.0	・新たな生徒会活動として生徒会通信の発行、マナー向上の呼びかけ、阪神昆陽祭での各賞の設定、オープニング、エンディングの企画、体育祭での生徒会種目の実施等を行った。	・今年度の新たな活動は、生徒会執行部個人個人の力に負うところが大きく、来年度以降継続的に実施していくためには工夫が必要。		

領域	評価の観点	評価項目	実践目標	自己評価	成果	課題	改善策
	キャリア教育・進路指導	キャリア教育の推進	10 キャリア教育に対する全職員の共通理解を図り、総合的な学習の時間を中心に、進路指導部と各部が連携して、社会的自立に向けた生徒の意識を高揚させる。	3.5	<ul style="list-style-type: none"> 各教科の通常補習及び長期休業期間中の入試対策補習、高認験補習を実施した。 地域未来塾として大学生による進学希望の生徒への勉強会を実施した。 ベネッセのClassi(インターネットを活用した自学自習のための教材)を導入し、進学希望の生徒をサポートする体制をつくった。 	<ul style="list-style-type: none"> 担任の生徒指導力を向上させるとともに、進路指導部と教務・ガイダンス部の有機的な連携を図る必要がある。 進学希望者の現状(学力、志望分野、志望校等)が十分に把握できていない。 教務・ガイダンス室及び学習支援室の有効な活用。 	<ul style="list-style-type: none"> 担任が積極的に生徒にかかわっていくことを主眼に置いた進路指導年間計画を作成する。 担任の進路指導力の強化を図るため個々の生徒についての進路先や指導方法を検討をする場を設ける。 教務・ガイダンス部は、1年次から在校年次の受講登録指導や学習相談、補習の企画、進路指導部は卒業年次の進路決定にかかわる指導というような、明確な役割分担の決定。
		進路実現のための力の育成	11 進学者向けの補習や就職講座を計画的に実施し、卒業後の進路を切り開く力を育成する。	3.0			
	教職員の資質向上	校内研修の実施	12 学校を取りまく諸課題について、適宜、研修会等を実施し、教職員の資質向上を図る。	3.3	<ul style="list-style-type: none"> 年度当初に生徒指導方針に関する職員研修及び授業開きに関する研修を実施した。 県内・県外の学校に視察を行い、先進的な取組について情報収集するとともに、本校の教育活動に取り入れた。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒指導の研修会を計画的、継続的に実施することはできなかった。 多部制のため、職員全員が集まって研修できる機会が少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> 夏季休業中や冬季休業中に問題行動の事例研究、特に留意すべき生徒指導上の課題についての研修を実施する。 会議日等を設定し、多くの職員が集まれる時間を確保する。
		先進校の視察	13 先進校を視察し、教職員が見聞を広めるとともに、学校運営を改善するための情報収集を行う。	4.0			
	危機管理体制の整備	家庭・地域・関係機関と連携した危機管理体制の充実	14 日頃より警察・消防・病院等、関係機関との連携を密にし、様々な危機に対応できる体制を整える。	2.5	<ul style="list-style-type: none"> 夏の避難訓練で職員から寄せられた問題点を踏まえて、冬の避難訓練計画に反映させることができた。 合同職員会議の議題にあげることで、高校・特支の全教員で避難訓練の意義を共有することができた。 伊丹市担当との話し合いによって、避難所対策を一步前に進めることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> より包括的で実効性のある危機対策マニュアルづくりと、その内容を全職員で共有していく機会が求められている。 授業時間中等、より実践に近い避難訓練を行うことで、危機対策マニュアルの精度をあげていく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ホームルーム活動時間以外での避難訓練を実施する。 危機管理マニュアルの改訂を継続的に行って、よりよいものにしていく。
		生徒の危機管理意識の醸成	15 阪神昆陽特別支援学校と共同で避難訓練を行い、体験的に生徒の危機管理意識を醸成する。	3.3			
教育課程	基礎・基本の徹底	わかる授業・生徒が主体的に学ぶ授業の推進	16 研究授業や先進校視察などを通じて、教職員の授業力向上を図り、わかる授業・生徒が主体的に学ぶ授業を推進する体制をつくる。	3.0	<ul style="list-style-type: none"> 年2回の公開授業週間にアクティブ・ラーニングの研究授業を実施し、指導力の向上を図った。 授業をビデオに撮り全員でそれを見ながら分析を行う、新しい授業研究会の方法を導入した。 	<ul style="list-style-type: none"> 研究授業で、アクティブ・ラーニングを導入できていない教科もあった。 新しい授業研究会の方法は、まだまだ改善が必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> アクティブ・ラーニングを導入する意図を全職員に理解させるとともに、日常の授業から取り組むよう共通理解を図る。 授業研究会を継続的に開催するとともに、授業に生かせるノウハウを蓄積、共有する。 わかる授業、生徒が主体的に参加できる授業の工夫とともに、教務規程の改善を行う。
		個に応じた学習指導の充実	17 少人数授業を実施し、生徒一人一人の学習状況に応じた指導を行うとともに、必要に応じて、補習等を実施する。	3.1	<ul style="list-style-type: none"> 年2回、生徒を対象に授業アンケートを実施し、授業の改善に役立っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業への出席率を向上させ、学習に対する姿勢を向上させる必要がある。 	
	特色ある教育課程の編成	多様なニーズに対応した教育課程	18 進路希望等、生徒の幅広い学習ニーズに対応した教育課程の編成を推進する。	3.0	<ul style="list-style-type: none"> 入門科目、発展科目、進路探求等、学校設定科目を拡充した。 入学前に基礎学力テストや三者面談を実施した後受講登録を行い、計画的な受講科目の選択をすすめた。 次年度の受講登録の日程を遅らせ、十分に生徒と面談してから受講科目を決定できるようにした。 	<ul style="list-style-type: none"> 様々な進路に対応するために、さらに学校設定科目を充実させる必要がある。 試行錯誤しながら受講登録を改善してきたため、検証が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 進路に応じた科目の選択パターンを検証し、開講すべき科目を洗い出す。 年間計画の中での受講登録の日程や方法の見直しを行い、さらに改善をすすめる。
		計画的な学習等の指導	19 生徒の学習状況や進路希望に応じた受講登録面談を行い、計画的な学習等についての指導を行う。	3.7			

領域	評価の観点	評価項目	実践目標		自己評価	成果	課題	改善策
	総合的な学習の時間	創意工夫を生かした取組	20	進路指導部・教務ガイダンス部と各部が連携したキャリア教育とともに、生活体験発表会や学校周辺地域への貢献活動等、生徒の体験に基づいた取組を推進する。	3.0	・自己を振り返るとともに将来に向けての目標を発表する「生活体験発表大会」や、自己有用感を高める「ふるさと花いっぱいプロジェクト」、「昆陽ふるさとクリーン・プロジェクト」も含めて、総合的な学習の時間で、総合的なキャリア教育を推進している。	・自立し社会に貢献できる人材を育成するためには、ロングホームルームを含めて進路指導の分野を強化する必要がある。	・進路指導部とガイダンス部が連携し、総合的な学習の時間の年間計画を見直す。
課題教育	交流及び共同学習	交流及び共同学習の推進	21	交流及び共同学習委員会を中心に両校職員の共通理解を図り、授業や学校行事、部活動等での両校生徒の交流の質的・量的向上を進める。	3.6	・月に1回の交流及び共同学習委員会は、生徒の情報共有の時間を設け、昨年度より両校の連絡が密に取れた。	・特別教室の使用について、両校がバッチングすることがあった。 ・勤務や授業の関係で、共同の学びを実施している担当者全員が委員会に出席することが難しい。	・バッチングが予想される場合には、事前に相談をもちかけることを徹底する。 ・委員会の時間の見直しをする。
	学校設定教科「共生社会と人間」	創意工夫を生かした取組	22	ノーマライゼーション委員会を中心に全職員の共通理解を図り、関係機関等と連携した体験的な学習等、創意工夫をした授業を推進する。	3.0	・数多くの特別非常勤講師の協力を得て概ね予定通りの授業ができた。 ・移動支援従業者の資格を15人の生徒が取得できた。 ・清流園と連携した避難訓練を実施することができた。 ・民生委員の方々の協力を得て、防災福祉マップ作りを実施することができた。	・一年を通じて生徒の学習意欲が継続しにくい。特に、校外の実習で実習先に迷惑をかけることもあった。 ・教材作りや授業で特別支援学校の教員に負担をかけている。 ・実習と実習の間に時間があつたりと、学びを次に活かすことができなかった。	・受講登録時に実習についての心構えを説明し、意欲の高い生徒に選択させる。実習先との連携を密にし、理解を求め。 ・特別支援学校の教員にとっても良い研修になっているが、標準化したテキストを作成し、加筆訂正程度で授業が行えるようにもする。 ・ノーマライゼーションについても、生徒が能動的に学ぶことができる時間をより多く取る。 ・年間計画作成の際に、より効果的な配列で内容項目を設定する。